

## = 基調講演 =

# 「私が見た聾教師の姿・そして山中福よ先生」

講師：高橋 澄氏(宮城県立盲聾学校卒 80歳)

皆さん、初めましてわたくしは聾啞者で高橋と申します。  
しかし、大勢の人たちの前で話すのは、初めてで本当にお恥ずかし  
ゅうございます。けれども、今から約70年前にもなりますが、思い  
出して語れるか、どうかは・皆さんに山中先生のことについて述  
べたいと思います。もしかすると、天国から山中先生も喜んで見て  
いて下さるかもしれませんね。

・山中先生は眼鏡をかけて天然パーマ姿、手話で教える教壇に立つ  
姿は今もはっきりと覚えています。器用だけではなく、賢明な生き  
方という聾女性像として、憧れていました。

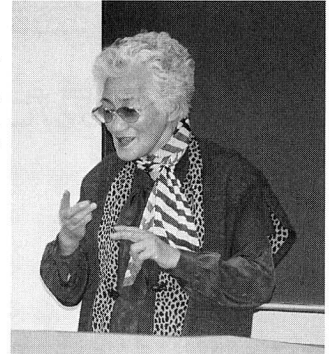
わたくしが聾啞になった原因は2歳の時、発熱が下がらないまま  
で、お母さんは側から離れられなくて必死に看病して下さいました。わたくしのお兄さんは幼い  
頃に病死した為に、今度は娘の澄までそうしないよう、お祈りしました。やっと、回復したわたく  
しの姿を見て安心した両親が声をかけても、反応がなく、聾啞になり、両親は泣く泣く、わたく  
しの成長を見守っていました。

時が過ぎて村の近所から、噂が流れて来たのは、「盲聾学校とゆうものがあるようですよ。」と  
聞かされたお母さんは近所にいる盲聾学校に通勤している盲女性教師に「盲聾学校は盲生徒だけ  
ですか？聾生徒はいますか？」と尋ねました。盲女性教師が「はい、聾生徒もいますよ」と教えて  
下さった時、お母さんは心から大きく喜んで、早速盲聾学校の所在地に、あれこれ、手続きして  
やっと盲聾学校に入りました。わたくしが初めて盲聾学校に入った時は、7歳でした。聾生徒の  
皆が楽しそうに手まねをしているのを見て「わあ！わたくしと同じ聾啞だね！」と嬉しく思ってい  
ました。同じ組になった聾生徒に「あなたも聾啞？」と手まねしながら、お互いに「うんうん」と、  
うなずいて皆も嬉しそうな笑顔が絶えなかった位でした。そして、皆が並んで四釜校長先生が挨拶  
して次々と先生が一人ずつ紹介されました。わたくしたちの新しい名札をもらって、うきうき  
しながら、「明日から、学校へ行って学んで頑張りましょうね」と山中先生が手まねで言いました。  
お母さんは「すみませんが、お尋ねしたいです。娘の澄が大河原から学校まで通学するのが心配  
です。片道だけで汽車は一時間、徒歩は40分間だと往復すると約3時間にかかる、遠いでしょ  
う。どうすればよいでしょうか」と相談した時、山中先生は「安心して下さい。寄宿舎があります。  
手続きしましょう」と言われました。

わたくしが寄宿舎に入って、その夜、初めて同じ聾啞者であるわたくしの同級生は女性が4名、  
男性は2名で年輩者たちも居て時間を忘れたように手まね表現が違って、おしゃべりが止まら  
なくて興奮していました。

毎朝、廊下を掃除する当番制なので、ほうきでやろうと、「早い者が勝ち」だと皆が奪い合っ  
たり、「澄さんは遅く起きたでしょ」と言われて、あっさり認めていたわたくしがやむを得ず、床  
を布巾で拭きました。

明日こそ！わたくしが早く起きて狙っていたほうきを手に入れてやった時、聾生徒が「あ、私  
が遅いね」とあっちに行きました。翌日になって「あ、皆もやっているなあ。わたくしは今まで、  
家に居た時は全く違うなあ。お母さんに甘えていたなあ。その頃は、わたくしは泣きペソ弱虫で  
気が小さい性格でした。ここへ来てから、自分でやるようになってわかってきました。同級生と



高橋 澄氏

口喧嘩したり、仲良くしたりでも、楽しい！！」と初めて分かりました。

そして朝8時になって学校へ行って、山中先生(修身、綴方、習字担当)が「私の名前は山中です」と黒板に書いて手まねは耳の後ろに髪をグルグルと回します。次は山川先生(算数、体育担当)も「私の名前は山川です」と黒板に書いて手まねは口の下に親指と人さし指を動かします。次に続いて加藤先生(木工担当)が「私の名前は加藤です」と黒板に書いて手まねは両手の人さし指を前に動かします。教師3人も聾者でしたが、あの時は珍しくなかったと思っていましたね。年輩たちは和裁、木工の職業科中心でした。幸いにわたくしのクラスは小学一年生で8人がそろったのは最初でした。山中先生は「自分の名前を覚えましょうね。名札を見て同じく書いてみましょう」と教えて、皆は一生懸命に何回も書きました。

自分の名前を書けるようになって、「先生たちの名前も覚えましょうね」と山中先生が言われて覚えて書けるようになった皆が楽しそうに学んでいました。わたくしが家に居た頃は、全く正反対のようでした。家の皆は聴者で何の話しているか、分からなくて聾啞である自分としては、淋しい思いでした。今みたいに同じ聾啞者たちが一緒に学んでいるのは楽しいから、自分も心を開くようになりました。

山川先生が算数の勉強時間に一、二、三……と数字をノートに書き写して、足す・引く方式も、 $1 + 1 = 2$ という指を数えて皆も答えました。「 $3 + 2 = 5$ 」と皆が片手で五つの指を表したら、山川先生は「5はこうだよ」と「ア」という指文字と同じく表現して皆も面白く同じく表しました。1. 2. 3. 4. 5も数字表現も教えて頂きました。

山中先生は修身勉強時間で黒板に書いた日本語を指して手まね表現しました。「かめ、うさぎ、いぬ」など一つ、一つで日本語と手まねも同時に覚えるようになりました。「昔は今の様な国語科目がなかったでした。だから、修身という科目で学びました。今、修身は入れてませんね」と講師は参加者たちに言いました。黒板に‘修身’綴方‘文字を書いて「皆さんもご存知でしょうか？綴方って・・今はありませんね。今も同じと言えば、算数、体育、社会、理科がありますね。なぜ、修身、綴方は無いのでしょうか。修身は戦前の学校教育の科目の一つでした。自分の身を修め、行いを正しく教える内容です。綴方は文を作る科目です。「今日は晴れました。明日も晴れますよう」という文を作って書きます。今なら、日記と同じ意味になりますね。山中先生は熱心で一人ずつを教えました。

わたくしが小学二年になって、山中先生も一緒でした。しかも、新しい小学一年生たちもやってきて、当時の先生は人手不足で山中先生が分身して教えていたせいで授業時間を途中で切れたり、わたくしたちは腹が立っておさまらない状態でした。気が付いたら、わたくしが小学三年、小学四年になった時は、同じ教室で小学一年～四年生も一緒に、山中先生は手が回らなくなりました。今度の新しい小学一年生担当は初めて聴者女性先生がやって来て、口話で教えてるのを初めて見て「同じ学校に同じ手まねで教えたらいいのに？なぜだろう？わたくしだって、手まねの方が覚えやすくていいのに？」と自分が疑問に思っていました。山中先生、山川先生が手まねや、日本語で教えた熱心さが伝わった生徒たちは勉強を面白く、学び続けました。

わたくしは小学二年の時、お母さんは産後肥立ちが復活出来なくて約3年半も療養入院生活を過ごしました。やっと、3年半ぶりで再会した時は、お母さんが「ちゃんと勉強やっている？頑張らないとダメよ。耳が聞こえなくても、文を書けるように励みなさい」と言われました。お母さんはわが子が聾啞でも、文を書けるように願っていました。

わたくしだって、「なぜ、わたくしだけが聾啞なの？生まれてきたのは、お母さんのせいよ」と責めていたけど、お母さんは「こんなことを考えてはいけませんよ。口がきけなくても、文を書けるなら、いいことよ」と言われて何回も書き続けました。又、わたくしが家の都合で寄宿舎やめ、通学になりました。その時、お母さんは帰り時間が遅くなるのが心配で山中先生に手紙

を送りました。山中先生が分かっている「澄さん、帰り時間が遅くてお母さんが心配しているから、勉強途中時間で帰ってよろしいです。もう時間で帰りなさい」と言われても、わたくしだけで先に帰るとは…まだ皆が勉強しているのに、うらやましくて淋しく帰りました。家に帰ったわたくしの顔を見たお母さんは嬉しそうでした。

わたくしが小学5年、6年になった時、いつのまにか、小学一・二年生は口話方式で学んでいるだけではなく、聴者教師数も増えたり、堂々した手まねが肩身狭くなったように感じました。山中先生と聴者女性教師が口論も目立つようになりました。聴者女性教師が「手まねなんて反対です。口話の方がよろしいでしょう。街の中で手まねしているなんてみっともないし、品がないでしょう」と、山中先生は「聾啞者としては話しが分かる為には、手まねが必要です。正しい文を書くにも、手まねすると意味が分かるし、力も伸びます」と反論しました。山中先生はこのように危険という身を感じたと思われたかもしれないでした。山中先生が曇っていた顔をして教室に入って生徒たちにこう言いました。「みんな、先にて聴者教師から言われました。手まねは止めなさい。口話の方が良いだそうです。ひょっとしたら、いつか、私が追い出されて首になるでしょう・・・」と言われて私たちが衝撃な気持ちでした。「お願いします。山中先生、辞めないで下さい。ここにいて」と皆から言ったら山中先生は暗い表情してうなずきました。

やっぱり、結果はわたくしが小学六年生卒業式で山中先生は盲啞学校から去ることになりました。卒業式後、お母さんは山中先生の姿が見当たらずに「澄ちゃん、山中先生に挨拶したいので、家を訪れたい。家は分かりますか」と言われて、わたくしは「分かります！いつも、春、夏、冬休みは山中先生の家遊びに行ったから、行きましょう」と山中先生の家を訪れました。山中先生の家に着いてお母さんが「ごめんください」と玄関を開けて、山中先生が驚いてわたくしが「お母さんが山中先生に挨拶して話し合いたいです」と言って山中先生は「上がってください」と嬉しそうに顔していました。お母さんからは「山中先生、どうかは仙台から行かないで下さい。娘たちは、はじめて中学部設置になります。せめて、盲啞学校だけではなく、塾を開いて山中先生から教えて頂きたいという気持ちは強くあります。両親たちに口こみして協力しあえて聾生徒が塾に通えるようにお願いしてみます」と頭を下げてお願いしました。山中先生は「ありがとうございます。気持ちは嬉しいですが、もう引越したくないといけません。東京に約束しており、私の老後もあって…ご理解下さい」と申し訳なく言いました。お母さんが「もう一つで聞きたいことがあります。娘が成長して学校を終わった後、どうすればよいでしょうか」と尋ねて山中先生は「聾啞同士は手まねを話し合っ必要です。文は聴者と筆談する時で必要で大切です。口話だけで生きていけません」とお母さんは「かしこまりました。あの、娘が年頃になったら、どうしましょうか。ずっと家に閉じこもると良くないでしょう。又、お母さんが老いて死んだ後、面倒を見るのも心配です」と言いました。山中先生は「もし、結婚出来たら、必ず相手は同じ聾者が良いです。家庭に入ると、何が起ころうと、手まねが通じるから、安心します。聴者男性と結婚しても話を通じないし、悲しむのは娘です。又は、食べて行ける為には、手まねを身につけて文を書けるこそ、働いてお金をもらえる自信をもてることです。それは一人前になる必要です」と助言を頂いたお母さんは深く感謝しました。その姿を見たのは今も忘れられませんでした。その会話は後になってお母さんから聞いて分かったことでした。それだけではなく、わたしたちの卒業式が近づいた頃で、聾教師3名を解雇することを聞いた親たちは衝撃されて残念がっていました。又、至急に親たちが会議したのは「新しい中学部設置しょうか」と学校に要望して「時間がかかる」と校長先生から返事がありました。やっと4月に入って中学部入学報知郵送して来ました。

わたくしは胸を膨らませて盲啞学校中学部入学式に参列しました。しかし、中学部一年の担当教師が現れた時は、聴者で口話、黒板に書くだけでそれを見たわたくしだけではなく、同級生た

ちも初めて大きな絶望を感じました。「手まね授業なら覚えていけたのに！今すぐに、口読み取るのが出来ない！」と不満たっぷりて手まねしたら、先生は「こら！手まねはだめ！」と怒鳴られて皆が静まっていた。口だけでパクパクしている先生を見ても分からなくなって授業も面白くなりませんでした。授業に追いつなくなって気がついたら、中学部卒業し、終戦後で社会に対しては落ち込んでいました。それは聴者に対して筆談するのが悩みの一つでした。働く為には、算数なら、なんとか出来たけど、筆談が問題でした。戦中は、授業時間を減らして農業をやったり一番で納得出来なかったのは、同じ中学部と言っても、会話するのも許されませんでした。わたくしは中学五年組は手まねで話し合ったのに、中学一年組は手まねせず、口話のみで廊下で話しかけても、避けられた時は、とても悲しかったです。

振り返ってみると、山中先生時代は学べて楽しかったことは良かったのに「わたくしだって、山中先生のいる東京に行ってみよう！」と考えて山中先生に手紙を出しました。手紙内容は「山中先生、お願いがあります。わたくしは東京へ行って山中先生のいる塾でも学びたいです」と山中先生からは「いけません。両親が心配になります」と返事がありました。そのことをお母さんに言ったら、「そうですよ。山中先生は分かります。女が一人だけで行くと危ないです」と言われて惜しくも諦めました。「お母さん、盲啞学校に行っても、先生たちは口話だけの勉強は分からないから、やめていいですか？」と言ったら、お母さんは「家に居ても何もならないから、だめです。学校に行きなさい」と・・・何もかも望みがフッと消えました。しかたがなく、訳もわからない口話授業を受けながらも、わたくしが発声するのも、読み取りするのも、全然分からなくて叱られっぱなし、空っぽな気持ちの連続でした。長かった中学部も卒業し、専攻科に入って洋裁だけの授業だから、口話授業じゃなくて解放されたけど、早く学校から離れたい気持ちがありました。

やっと、学校からさよならして一年後、結婚しまして、初めて痛感したのは、筆談したことでした。急に親に頼りたくても遠いのだし、特に病院で診てもらう時は、訴えたくて書けないのが一番で辛かったです。後になってこのメモをお母さんに見せたら、お母さんは「こういうことだよ。発熱したら、お風呂に入ってはいけない。薬を飲む時間も気をつけて」と手まねで説明された時に意味をつかみました。「ああ、どうして、わたくしは出来ないのだろう？」と悩んでいてよく考えてみると、「小学一年～六年までは、手まねと共に文を書けたのに、中学部は口話だけで文をまともに書けなかった。発声練習した時間がムダだったの？何のために中学5年間学校に居たの？」と自分を追い込みました。でも、前向きで筆談方法については主人と学び合ったり、近所の人から教えていただいたり、一枚のメモでも、大切にしながら復習しました。はっきりと言って聾者は手話と書ける日本語を身につけないといけないです。相手が聾者なら手話、聴者なら筆談という2つを持てることが大切です。お母さんから何度も言われたことは今に考えてみると、本当だったね。あの時は、障害年金がなく、自分の働けるお金で食べていけないといけなくて、再び勉強できないままで働くことに励んでいました。

子供たちが大きくなって10年後主人が夏の休みの間に紳士服縫製研修の為に上京することになりました。主人が「なあ、一緒に行こう！」とわたくしが「子供たちのことはどうするの？無理でしょう」と主人は「まあ、いいじゃないか？子供たちは君の親に預かってもらってはどうか？お願いして話し合ってみよう！」と結局はわたくしの実家が子供たちを預かりました。手紙で連絡合った山中先生の家を訪れて約20年ぶりに涙の再会して山中先生に嬉しそうに抱かれて昔の話が咲きました。その夜で寝る時間だが、小さめのライトを明かりにして山中先生はぶ厚い本を読書してるのを見た時は、なんとなく羨ましくて分かるような気がしました。今に思い出してみると、山中先生はいつも、本を読んでいました。やはり、教師になれたからこそ、努力が必要だったんですね。又は、山中先生という人物が日本初として聾女性教師だと聞いた時は驚きました。わたくしも山中先生のように目指したかったけれど及ばなくて名残な気持ちです。聾女性としては負

けずに、働いたり、育児したり頑張ってきました。

山中先生が嬉しいことを語りました。山中先生の教え子だった聾女性は年中は何回も手紙文通して、一年一回で教え子が手作りした着物を送って頂いて使うのがもったいない位で心をこめてタンスの中に入れていました。

この教え子の名前は五島さんで山中先生を慕っており、深い恩もありました。それを聞いてやっぱり、何人も山中先生を慕っていた聾生徒が居たことは改めて知りました。わたくしは卒業後で再び、山中先生に話し合えたのは本当に夢のようでした。時間が迫ってきて、山中先生が「澄さん、生きていくのは、耐えることを忘れてはいけません。文を書ける自信も持って前向きして頑張ってください」と助言して下さっていました。わたくしは「もうダメです。もっと文を上手く書けない」と弱音を吐いたら、山中先生は「きっと大丈夫ですよ。もっと、聾唾仲間たちと触れ合って学んで頑張っていくのよ」と言われて、その日が最後の話し合いになりました。もう、時間が過ぎましたけど、今になって、自分の人生を歩んできたことも山中先生からの言葉を思い出す度に頑張れる気持ちがありました。確かに、わたくしは小さい時で甘えて育って来ました。結婚後で苦い経験を重ねたり、同じ聾唾仲間たちと助け合ったり、口論したり・・・人間として大きく成長することは大事だと思っています。もっと、山中先生と話し合いたかったが、残念な気持ちですが、山中先生の教え子として、大いに誇りがあります。

わたくしが結婚してから40歳の時、主人が脳卒で倒れて復活したけど、毎10年ごとに入院を繰り返しましてわたくしが40、50、60、70歳…75歳の時で主人があの世界へ去りました。主人が入院している間に看病した時、医師と看護師と筆談することが一番大切と痛感しました。食べ物に関する注意事項とか、日常生活等文を読んで理解出来ないと、命取りや危機に関わるので、頭が痛いほどでした。その時、わたくしが一人で「お母さんから、山中先生からも言われたことは本当だった。聾唾でも、文を書けて読めることは社会で役に立つんですね」とあれこれ、考え出しました。紙切れ一枚でも、この文を何回も読み返して文章位で書けるようになりました。しかし、「…は…に…の…へ」という文章のつながりだけは意味を分かりたくても叶いませんでした。医師が「主人は右半身マヒしているようで心臓も弱っていますから、どれ位に生きるか、どうかは…」と告知されて数日後で亡くなりました。

主人が亡くなる前に夫婦の間で手話で話し合えるのは、何よりでわたくしの生きがいでした。「主人が先に逝くと絶対にダメよ 聾唾夫婦の間は手話で語る時間が大切だよ 又、経済、生活もお互いで支え合うのも大事よ」と主人に何回も支えました。主人は「本当だね。もう生きられるか、わからないね」と笑っていていつのまにか、さよならした時は、わたくしが淋しくて落ち込みました。しかし、聾唾仲間たちが居るからこそ、県・市協会老人部行事参加し、10年間も続いている娯楽「萩の茶話会」も顔を出しておしゃべりして楽しんでます。

わたくしは今一人暮らししていますが、やっぱり、仲間と一緒に語り合う時間が必要です。一人だけで生きていけるとは有り得ません。わたくしの家の近くで老人姿を見かけていますが、ほとんどは孤独暮らしのようで犬と散歩したり、外を眺めたり、何もしないようです。それを見るだけで、「あの人のようになりたい」と感じています。ですから、出来るだけ集会に参加してお金をかけても、楽しむのが第一です。だから今、来て下さった皆さんに会えたことも、わたくしが居ることも嬉しく思っています。家には誰かと2～4人位で居てもいいですね。家に帰ると、暗くて電気が付けず食事を取るのも、テレビを見て居眠りするとか、心寂しいです。やはり、相手がいると、空気が変わるし、明るくなり、話し合うのも、目が生き生きしますね。

ふっと何度も思い出してしまうのは、山中先生から言われたことです。「聾唾でも不幸ではなく、手話出来て、文を書いて読むのもいいこと。聾唾相手なら、手話で話し合う。聴者相手なら、筆談する。相手が居ないなら、本を読むということ」わたくしはどうしても文章を上手く書ける

ように望んでいたけど、努力不足でしたね。一番で活きるのは、手話ですね。聾者同士で手話しているのを見るだけでわたくしも楽しくなります。聴者同士で何を話し合っているか、わからなくては気持ちもつながりませんね。手話で話し合うなら、どこの場所でも、目が届ける位置なら通じ合うのが素晴らしいです。たまに「聾啞者は不便でもなんとかして生きていける」と自分の中から咲くように飛び出していこうと思っています。

まず、山中先生について述べます。山中先生は東京生まれで同じく官立盲啞学校を卒業した秋田生まれだった主人も宮城県立盲啞学校の教師で仙台に来ました。そして山川先生は地元盲啞学校卒業したが、在学中にて山中先生の教え子でした。山中先生は山川さんの才能を認め、校長先生にお願い申し上げた通りで助先生になられました。最後に加藤先生は同じく地元盲啞学校小学部卒業後で官立盲啞学校中学部木工科に習った後、母校に帰り、木工科の先生になりました。よく見ると、3名も聾教師だが、聾児の為に聾教育の目覚ましい活動を力合わせてやり遂げたと言えるでしょう。しかも、偶然と言いますと、知人から聞きましたが、加藤先生が官立盲啞学校の同級生だった牛山翠子さんもいらっしゃいました。牛山さんは数年前に姪のいる仙台へ越しまして、93歳で元気にいらっしゃいます。ここの学会に参加したくて残念ですが、健康に気がつかっているようで来られません。加藤先生は現在は健在でしょうか、消息が知れませんので、無念です。山川先生は数年前にお亡くなりになりました。

今から思い出してみると、このような聾教師が居たので、聾児たちの為に手話と黒板に書く日本語も楽しい勉強を教えていたことは、本当に私たちが幸せの一時でした。山中先生は各クラスにあちこちで教えたり、どうやら、何役を勤めたように、たくましいだけではなく、なんと、両手も出来る(書く時は右、和裁で縫う時は左)という器用な女性という存在でした。聾教師3名は聴者教師に対等であり、手話から手話を学ぶには、聾啞者として誇りがあり、私たちに継がれたように誇りを感じ、感謝しております。やっぱり、聾学校に聾教師から聾生徒に教えるのが何より、一番でお願いしたいことです。皆さんもそうあって頂きたいです。もう一つ言いたいことがあります。口話教育に対してです。先にて述べたように、わたくしは小学一年から六年まで手話と日本語文章中心で受けましたが、中学一年に入ってから、いきなりに発声、読み取り練習時間に回され、日本語文章力が下がってしまい、授業中は分かるふりするようになってしまったんですよ。クラスの皆も、先生の口話読み取れるのは、自分の名前だけで手を上げる状態でした。「勉強なんて要らない！来てても無駄！口話を読み取れないから、文章を書けなくなったなんて悔しい」と抑えきれない毎日のように心の中に訴えていました。ですから、個人ごとに認めるように学ぶ方法あれば口話が得意な方なら、口話で授業方式へ、手話が要るなら、手話で授業方式へ分けたら自分の力を伸ばせるから、いいのではないかと思いますね。ある知人から聞いたところで昔、高橋潔先生がいた頃の市立大阪聾学校の場合は、口話だけの授業クラス、口話と手話も同時授業クラス、手話だけの授業クラスであったことは、羨ましく思っていました。宮城県立盲啞学校当時は、口話方針に抑えてから、聾生徒たちはもうすでに闇の中を歩き続けたでしょうね。現在はどうなっているのでしょうか？まだ口話教育だとせめて、3つの教育方法で生かしていけるよう、聾学校の教師の方々が理解して頂けたら、どうでしょうか。わたくしがいた当時は、校長先生は聴者で聾教師が3名、盲教師は2名、用務員1名でした。

あ、思い出しましたので、申し訳ありませんが、話を戻します。わたくしが小学部一年で入った時、4月から寄宿舎に入りましたが、夏休みが終わる頃で「もう学校へいかない！行きたくない！寄宿舎もいやだ！」とわたくしがお母さんにいやいやと言いました。お母さんが山中先生に手紙で相談したら、結局は通学に決めました。お母さんは「いいね？道路は分かるね？よく注意して歩きなさいね」と言われて気持ちが晴れていました。わくわくで歩いてみたら、仙台駅から北七番丁盲啞学校まで40分～50分間がかかりました。帰りには、大河原駅に降りてから家に歩い

たら、10分間位でした。行き帰りも汽車、徒歩も合わせると3時間にかかっても、山中先生がいる楽しい授業あるし、同級生も来てるから、あきらめなかった。それに、学校登校途中で山中先生の家もお見えになります。山中先生は子供がいなかったの、養子(女の子)を育てていました。この女の子は聴者でも、山中先生がいつも、手話で会話していました。山中先生は「綴方については忘れないよう、身につけなさい。聾啞だからでなく、友達と手紙文通とか、楽しめますよ」と何度も言われました。

わたくしが小さい時、両親も兄弟も話し合っているのを見るだけで泣いてしまって心が叫んでいました。「お母さん、わたくしだけ、聾啞になったの？こんなわたくしを生まなきゃよかったのに！生きるのはいや！死ぬ方がいい！」とお母さんに責めたが、「だめよ！死ぬとは、バカと同じ。生きて学んで楽しくお母さんだって働いたお金をお前に生かしているから。お前が書けて頑張れば、お母さんはとても嬉しいのだよ」と言われて返事が出来なかった。わたくしは貧しい家庭だったので両親は汗を流して働いてわたくしが学校へ行ってるから、頑張らなくてはいけないと心に誓いました。ここまで生きて来られたおかげでどれどれ、世界の中に生きる人間が居るなあ。生きている間で誤ってもやれるまで気持ちが大切ですね。一番で生かすと言えば、時代が変わっても仲間たちだけは絆のままです。皆さん、人間として触れ合うのを大事して下さい。わたくしの話は終わらせて頂きます。本当にありがとうございます。(参加者たちがひらひら拍手の花、花)

司会 皆さん！講演を見てありがとうございます！本当に、高橋さんが講演する時、ハラハラするかと滑らかに講演して頂けたことは、嬉しく思っています。改めて高橋さんに拍手を！！皆さん、ご存知のように宮城聾史研究倶楽部結成してから、今年で3周年目になります。聾年輩に取材してあれこれ、見て来ました。聾者の年代が違ってもやはり、最初で聾者同士が会った時はこうなりますね。1つ目は見た時、同じ聾者！2つ目は同じ手話を使っている！3つ目は話が通じる！というような聾の眼が生まれますね。この3つ目は聾者としての生涯まで理念を持ちますね。先に高橋さんが述べたように、聾教師の名前表現はあだ名と同じく付けています。山川先生は口形はへ型となっているので、六の数字を口につけて下に2回と下がります。当時で山中先生の教え子だった山川さんの学力を見通して、厳しく教えたり、期待した通りで卒業後、校長先生に「山川さんを助教師推薦したい」とお願いしたら、承諾しました。当時は校長先生は山中先生を信頼していたようで何もかも、任せようでした。だから、山中先生は頭の中に「聾教師と聾児」のことを精一杯で指導を遂げました。又、次も生徒だった加藤先生もこうなりました。加藤先生は裕福な家庭だったので、山中先生の母校だった官立東京盲啞学校へ入校しました。おそらく、宮城県聾生徒としては、官立盲啞学校に入校したのは、加藤先生が第一号だったかもしれない。そう、たまたま、牛山さんの同級生だと・・偶然でした。前に牛山さんからの古いアルバムを見せて頂きました。可愛らしい制服姿の加藤さんの顔が出ました。聾者って世の中にもせまいものだと、感心しました。加藤さんが卒業後、仙台に帰って山中先生が早くも推薦教師を雇っていました。しかも、口話方式教育方針された為に、山中先生は叶わず聾教師の任命を止められたように痛感したと思います。あ、想像しちゃいましたけど「もし、強制的な口話制度がなければ、間違いなく、聾教師も聾児も増えるだろう！だったら、山中先生から山中校長先生になったら、歴史が変われるなあ！それが惜しい！！」と個人的で思っています。

山中福よ先生の主人だった山中忠太郎さんも教師でした。名前の手話表現は額に人指しを曲がってしわを寄せると表します。山中忠先生は肺の病気(後は結核病名)で黒板に書く時、手は何回も額の汗を拭いたのを見て聾生徒たちが、こういうあだ名手話表現を付けたそうです。山中忠先生は地元として宮城県立盲啞学校の聾教師になったのは最初の方です。宮城県立盲啞学校へ教師

になられたきっかけは当時でちゃんと県立盲啞学校設置はなかった。私立仙台啞人学堂を開いた経済は菅原先生が大きな自己負担を背負いながら、何年間も何度も県庁へ粘り強く要望提出しました。たまたま、新知事になられた森知事(秋田県出身)は「盲啞学校設置は必要!」と指摘して、やっと我が校を動かし始めました。それに奇遇と言えば、秋田県在住だった時、県知事森氏は山中忠先生の両親が知り合いでありました。山中忠先生は幼児期に中耳炎の為、聾になりました。優秀生で当時の秋田県知事森正隆氏の協力を得て上京し、東京盲啞学校の師範科を卒業し、北海道小樽盲啞学校に勤務しました。一年後、宮城県知事になられた森氏のお勧めで宮城県盲啞学校に教務主任をしておりました。山中忠先生は聾者で訓導の資格を得た日本で最初の方でした。かかわらず、福よさんが看病を尽くしたが、肺結核の為に逝きました。聾教師という遺志を引き継いだ福よさんが先生になり、17年間も仙台に過ごしました。口話法が導入されて昭和12年3月に退職しました。仙台駅で別れる時、多くの教え子たち、教え子の両親も、ろう協会活動している聾者たちも涙で見送りました。その時、山中先生はそれを見て想いの詩を書きました。壁に貼っている紙をごらんになって下さい。そう、山中先生は俳句好きで文章は気持ちに伝わっているように感じます。

山中先生はもともと、聴者だが、数え8歳の時、聾となったので先に日本語獲得したと思われまます。聾となった娘である福よさんを見てショックを隠し切れない両親が5年間もあちこちの名医に連れたり、色んな神様、仏様に連れまわされたけど、だめだった。福よさんが13歳の時、あきらめないお母さんが知人から情報を得て官立東京盲啞学校へ行きました。盛んにてまねしてるのは、福よさんは今までに見たことがないし、変な表情を見ておかしくてたまらなくて大声で笑っていたら、お母さんは「お前たちと同じ人だから、笑ってはいけない!ここに入るのよ!」と叱れました。福よさんは読書するのが大好きで学校に学んでも問題がなかったようだった。福よさんは教師念願したように師範科卒業後も母校の教員として勤めていました。山中先生が宮城県立盲啞学校に勤務した頃で生徒たちの両親たち側から聾教師の山中先生に対しては違和感がなかったでしょうか?(司会から講師の高橋澄彦に質問したら高橋「そうですね。別になかったですよ」)きっと、親たちは自分の子供も山中先生のようになってほしいという望みもあり、聾教師も3名が居たから、当時、生徒たちだった聾年配が今になっても「聾学校の教師になりたかったね」とよく言われていました。今から70年前に過ぎたが、口話法時代は聾教師の姿が消え、時が過ぎたら、ろう教育研究、ろう教育歴史とか著しくなり、再びで「聾教師が必要!」と次々と取り上げるようになりました。今、活発になっている「龍の子学園」も、その中に聾者スタッフが積極的に取り組んでいる姿を見ると、70年前に聾教師が熱心だった頃が甦った感じがするのは、不思議ですね。次はトークショータイムに入ります。

(トークショータイム)

司会 お待たせしました!只今からトークショータイムに入ります。主なテーマは「山中福よ先生の思い出」です。まず、3名の方々より紹介します。基調講演して頂いた高橋澄さんは戦前で当時、宮城県立盲啞学校にて小学一年から六年まで山中先生の教え子でした。次は宮下さんは戦中で当時、私立松本聾学校中学部にて山中先生の教え子でした。最後に伊藤さんは戦後で当時、早稲田大学在学中に山中さんと話し合ったことがありました。

この3名とも戦前、戦中、戦後という期間で山中先生との出会いは不思議ですね。宮下さんから語って頂きたいので、よろしくお願いします。山中先生が松本聾学校に転勤していた時、初め



てお会いした印象はどんな感じでしたか？

宮下 おお、私の顔が写っていますよ！（展示した写真を指して）当時は私が中学生で坊主頭だった。ほら、私の顔を見れば分かるでしょう！変わらないよね。午前中にて高橋さんの基調講演を聞いた時内容は初めて知りました。山中先生は宮城県立盲啞学校について話してくれなかったのでも知っていませんでした。当時、私は習字に励んだので、山中先生は厳しい目を持っていました。私は未熟で習字の校正用の赤い墨をせっせとすりながら、側に居た山中先生はさすが、貫禄あって私はビクビクしていましたね。本当に習字の校正用の赤い墨をするなんて、面倒くさくて嫌になった時、山中先生から「もっと強くすりなさい！」と怒鳴られてしまいました。習字時間になって、書いたのを見た山中先生は「一の文字が下がっている！この文字は流れている筆を押さえない！」と注意されて、書いた習字は赤だらけの校正が目立っていたが、山中先生は目が鋭くて厳しく教えて頂きました。習字が上手く書けるだけでなく、墨のすり方も細かく指示されました。そのおかげで、今の私は習字はプロ並みで自信を持っています。やはり、私が努力したのだと思うけど、山中先生のおかげで大きく感謝しています。

司会 大きな存在のある山中先生からいいことを身に付けて教えてもらえましたね。あ、戦中だから、何か、山中先生から体罰されたことがありますか？お尻を叩かれたとか、頬を殴られたとか。

宮下 はい、よくありましたね。クラスメートは7人居て授業中を注意する生徒に向かってチョークを投げます。当てられた生徒は廊下に立ちながら、両手で水が入ったバケツを持ちます。生徒は勉強集中がなく、山中先生は怒って授業の途中で職員室へ行って戸を閉めました。私は生徒会長だったので山中先生に申し訳なくてクラスメートに注意したが、止むを得ず、私は職員室に行って山中先生に「どうか、教室に戻って下さい。皆が真面目に学びます」と何度も頭を下げたが、許してもらえなかった。仕方がなく、教室に戻って待っていたが、十分後に山中先生が戻って来ました。ますます、山中先生は厳しい姿勢で「キヨロキヨロしないで先生をよく見なさい！」と何度も怒鳴られて、生徒たちは静まっていた。悪いことをした生徒は必ず、廊下に立たされますが、私は一度もなかったけれど、生徒会長のこともあって油断できない毎日だった。

司会 まあ、教え子たちを厳しく叱ったことも、皆さん生徒には役に立ったと思いますね。次は伊藤さんからお願いします。

伊藤 戦後、山中先生と話し合えたのは、私は当時、早稲田大学在学中でした。知人から「山中先生は才女ですよ！お前より年は随分離れているけど、話し合ってみたら、惚れるかも？」と言われて「気は確かなのか？」と疑って、数日後、案内してもらいました。初めて山中先生と会った時、私より、もっと年上だが、手話表現はハキハキと印象が強かったせいで、私は唖然としたままでした。目の前に居る聾女性は宮城県立盲啞学校、私立松本聾学校の聾教師として励んでいた山中先生の姿であり、信じられない気持ちだった。又、今までに聾女性高齢者と話し合ったことがあるけれど、ほとんどは「そうですね」「本当ですね」という同じ意見なのに、山中先生は、全く大違いであった。

山中先生は自分の考え方を持っていて意見する姿は今までにない魅力的な聾女性と言えます！！「先駆けするような新しい聾女性像」だと、認めており、私も惹かれました！ウソではなく、本当の話ですよ！私だって年老いた聾女性に惹かれたのは、生まれて初めてでした！！今になっても忘れられない！（伊藤さんは目がうるうる！！）

後になって何度も話し合うと、ますます面白くなって来ましたよ！ある日、聾女性高齢者たちが茶の会で人の噂話したら、山中先生も居たが、「何なの？くだらない話は不要だわ！未来の聾啞者の為にいい案が浮かばないの？」と矢を射るような意見を見た時、思わず、目が光っていました。山中先生は「伊藤君なら、将来はきっといい役に立つでしょう！応援するから最後まで走りなさい！」と迫力な手話で言われて、お尻を叩かれたような気がして、ここまでやって来れましたよ！だから、強烈な助言を頂いたので、恩人と思える方なので、今になっても忘れられません！心の中にいい言葉を飲み込んでいますからね。本当に山中先生は面白い話が多すぎてこの場で話すと、時間が延びますよ！高橋さんは戦前、宮下さんは戦中、私は戦後と合わせると、伝記を作れますね。高橋澄さんの手話表現はやはり、昔の大正時代頃の雰囲気伝わって、しみじみと心に染まれて感動しました。そう、高橋さんが語った手話姿を見ると、山中先生の面影が甦ったような気がして、心から泣けて嬉しく思います。本当にありがとうございます。

司会 山中先生とお会いになった時、何歳でしたか？

伊藤 あ、私は早稲田大学在学中で22歳の時でした。山中先生は定年後で60歳すぎた頃と思います。

司会 そう、山中先生はあの頃聾女性の生き方は現代女性並ではないか？あの頃は聾女性が結婚すると、家に留まり、旦那さんと子供の面倒を見たり、家を守るイメージでしょう。しかし、山中先生は教師、家事もやりこなすとは、伊藤さんが言った通りで新しい女性像と言えますね。聞きたいですが、山中先生が手話表現している雰囲気は今の聾女性たちの中に似ている方が居ますか？

伊藤 うむ、難しい質問ですな。確かに、考えて見ると、今の聾女性は山中先生みたいな手話表現しているのは一人も居りませんね。もし、山中先生みたいな女性が出現してきたら、きっと、惚れるかもしれませんよ！（会場内は爆笑！！）まあ、生まれ変わってきたら聾教師を目指す聾女性が居たらね。

司会 皆さん、今の3名の方から山中先生の思い出を語っていただいたのを見ると、不思議な縁でつながっていますね。やはり、山中先生に関する本を作りたい気持ちがありますね。高橋さん、宮下さん、伊藤さんとも本当にありがとうございました！！これでトークショータイムは終わらせていただきます。

文責 細川かおる